

中央大学には、かつて都心キャンパスから多摩キャンパスまでを夜通し歩くナイトハイクというイベントがあった。現在、本学に通う学生の多くは、このイベントの存在を知らないのではないだろうか。そこで、今回は、ナイトハイクのはじまりから終わりまでを紹介したい。

ナイトハイクのはじまり

ナイトハイクの最初は、1967年10月31日から11月6日にかけて開催された白門祭の実行委員会が主催する催物であった。行程は、11月3日午後7時に駿河台校舎の正門を出発し、目黒通り—環状七号線—玉川通り—山手通り—甲州街道—荻窪—青梅街道—新宿—新宿通り—靖国通り—を経て、11月4日午前8時までに再び駿河台校舎の正門に戻る、というものだった。約50キロメートルの環状のコースである。

白門祭実行委員会主催のナイトハイクは翌年も開催されたが、69年に大学紛争の影響で白門祭が中止になると、同時にナイトハイクも中断されたのだった。

ナイトハイクの復活

1972年10月28日、一時中断されたナイトハイクが復活した。これは、学生部学生課が69年以来「大学として行事らしい行事もなく在学中になにかをやって卒業したい」という学生の要望に応え、スポーツを楽しむ集いシリーズの1つとして企画したものである。

10月28日午後9時に駿河台校舎の正門を出発し、翌朝8時までにゴール地点の多摩校地へ移動する、という催しだった。そのコースは、駿河台校舎正門—小川町—九段—千鳥ヶ淵—甲州街道—新宿—調布—府中—立川—日野橋—川崎街道—多摩動物公園前—多摩校地だった。参加者約1,800人が順位を競い、1,553人が約50キロメートルの道のりを完歩した。チェックポイントの新宿、調布、府中、立川、川崎街道ではゼッケンにスタンプが押され、ゴール地点では豚汁などの食事がふるまわれたようだ。

ナイトハイクの変遷

学生部主催のナイトハイクは、1973年にも開催されて恒例化した。80年3月の駿河台閉校後は、後楽園キャンパスがスタート地点となった。そのコースは、後楽園キャンパス—白山通り—神保町交差点—靖国通り—九段坂—上半蔵門—新宿—、新宿から先は従来と同様である。85年は、本学創立100周年を記念し、本学学生3,500人に加え、

一般市民も参加した。コースは、6月1日夜から翌朝にかけて後楽園—多摩を歩くAコースと2日目の早朝に府中駅—多摩キャンパスを歩くBコースが設けられた。この試みは、翌86年から87年にかけて踏襲され、フルコース（後楽園—多摩）とハーフコース（仙川—多摩）で実施されたが、88年以降は従来の後楽園—多摩に一本化された。

ナイトハイクのおわり

多くの学生が参加し、「名物行事」や「伝統行事」と称されたナイトハイクは、1992年にその実施が見送られた。それは、前年のナイトハイクにおいて、参加者と車との接触事故が発生し、さらに地域住民から参加学生の違法駐車や飲酒・騒音などに対する苦情が寄せられたからである。

翌93年のナイトハイクは、学徒出陣50周年のピースファイアナイトハイクとして、10月9日から11日にかけて実施された。参加者は、50人1グループで平和を祈念するピースファイアを掲げ、駿河台記念館—後楽園—多摩を歩いた。これにより、ナイトハイクは整然とした行事となり、社会的意義をも持ったが、結果としてこの年が最後となった。94年以降は、ナイトハイクの代替行事として、相模湖公園—高尾山—多摩を日中歩くデイハイクが実施されていくこととなる。

大学史資料館でよみがえるナイトハイク

2024年4月1日、多摩キャンパスの炎の塔2階に大学史資料館が開館した。その常設展示室には、本学が創立された1885年から現代にかけての本学の歩みを知ることができる資料が展示されている。展示では、ナイトハイクも取り上げられている。手ぬぐいや完歩賞メダルなど実際に使用されたものを観覧することができる。また、窓際の壁面に展示されている年表には、ナイトハイクに関する写真も掲載されており、当時の様子を知ることができる。

大学史資料館を訪れ、ナイトハイクを楽しんだ当時の学生気分を味わってみたいだろうか。



ナイトハイクスタート地点(1972年)



大学史資料館におけるナイトハイク関係資料の展示(2024年)